

## レーザーコンパス

## お国訛り

保立和夫\*

Kazuo HOTATE\*

光を用いたセンシングの研究を、大学院以来もう20年も続けてきた。といっても、光ファイバジャイロを中心としたファイバセンサや、レーザーのコヒーレンスを制御したセンシング手法など、勿論限られた分野に於いてであるが。その中で多くの学会とお付き合いを頂いている。

もともと「センサは千差万別」といわれるように、計測技術は多岐にわたる原理・応用分野をもつ極めて広範な領域である。光センサひとつをとってもそうである。本レーザー学会にも、勿論この分野のアクティビティがあるし、電子情報通信学会、応用物理学会、計測自動制御学会、電気学会……に於いてもそうである。

いろいろな学会に同じ様な研究会・調査委員会が多過ぎる、統合したらどうか、との意見をときどき聞く。確かにそうできれば情報収集等で有効な面もあるかも知れない。しかし、多分統合など無理なことであるし、だから無理してしないほうがいいと思っている。最近特に感じていることであるが、一見同じ様な活動に見えても、学会が異なればそのスタンス、言い換えれば集合としての活動の重心が違う。光の応用として計測を手掛けている人と計測の為に光を扱っている人とで、違いがあるのはあたりまえとして、前者のカテゴリに属する人の間でも、やはり違うのである。光学という共通の概念に基礎を置いて研究を進めているのは同じではあるが、発想の原点がどこか異なる。

これは、同じ日本語の中にも方言が沢山ある様なものであろう。ふるさとを想い、お国訛りを愛するように、研究者にもある学会への帰属意識があり、その歴史と伝統の上に成り立ったスタンスでの活動に、集合としてはなっている

ように思われる。

境界領域で新しい研究分野が創造されている。これは、なにも大きく内容を異にする分野間に限らず、同じ光技術の中でも上記のようなスタンスの違う学会活動間に、やはり新しい分野を創造する可能性があると思う。実際私自身、主に帰属していると考えている、つまりは主たる発表の場としている学会とは違う研究会等に参加させて頂いて、研究上の重要なヒントを得た経験がある。ただ逆に、「それは私がもう10年も前にやっていたのに」と、ちょっと残念な思いをしたこともあるが。

如何に情報化社会といえども、全ての情報を入手することはできないし、ましてや理解することなど不可能である。そこで、上記の様な残念な思いも起き得るし、同じ理由で研究遂行上の新たな感動を得ることも可能になる。似たような活動をいっそもとめてしまったら、結局はひとつの重心のまわりに分布した研究活動になってしまうことだろう。

歴史と伝統を大切に、そのスタンスでそれぞれが大いに活動し、努力をして互いの情報交換の場を持つことにより、より多くの研究発展上の感動を得たいものである。それぞれのお国訛りを大事にしながら、積極的に旅に出ることで、共通言語である「光技術」がより大きく育つようにと望みたい。

そう思って、いろいろな学会の活動をお手伝いさせて頂いているが、最近では肝心の研究会等の場にゆっくりと身を置く余裕がなくなってしまっていることを痛感している。小生にとっては、この点についての反省と対策が急務である。

\* 東京大学先端科学技術研究センター (〒153 東京都目黒区駒場4-6-1)

\* RCAST, Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo (4-6-1, Komaba, Meguro-ku, Tokyo 153)